関西大学学術リポジトリ
Kansai University Institutional Repository

「う」と「だろう」

著者	長井 香奈子
雑誌名	國文學
巻	92
ページ	329-354
発行年	2008-03-01
URL	http://hdl.handle.net/10112/1195

「う」と「だろう」

長井　香奈子

第一章　はじめに

一般に、「だろう」は推量の助動詞として認識されているが、活用語が推量を表わすには、「だろう」が接続する場合と、助動詞「う」「よう」が接続する場合がある。

現代では、助動詞「う」は五段活用の動詞・形容詞・形容動詞・助動詞の未然形に接続し、五段活用以外の動詞には「よう」が接続する。また、「だろう」のように体言や副詞には接続しない。その結果、「う」「よう」は意志を表わす助動詞としての働きが強くなったとも考えられ、推量用法は「う」から「だろう」に交替したようだ。

本稿では、推量を表す場合に、どのようにして助動詞「う」「よう」が、「だろう」に変化するのかを、夏目漱石の作品を中心に、三遊亭圓朝、森鷗外を参照しながら考察する。

構成は、全五章で、第二章で終止用法における「う」と「だろう」、第三章で疑問用法における「う」と「だろう」、第四章で仮定用法における「う」と「だろう」、第五章では「です」「ます」に接続する推量形を取り上げ、それぞれ動詞に接続する場合、形容詞「ない」に接続する場合、助動詞「ない」に接続する場合に分けて述べることにする。

第二章　終止用法における「う」と「だろう」

終止用法で推量の助動詞が用いられる場合、「う」と「だろう」のどちらを選択しているのだろうか。そのことを「う」（「よう」）と「だろう」が動詞に接続する場合、形容詞「ない」に接続する場合、助動詞「ない」に接続する場合に分けて考察する。

二―一・動詞に接続する場合

先に述べたとおり、活用語が推量を表わす用例には、助動詞「う」「よう」と「だろう」を用いた二通りの表現が存在する。

「う」には以下のような用例が存在する。

（一）「実は毎月余らないんです」余ろうとは健三にも思へなかつた。　『道草』二十

（二）けれども催促状を受取る迄は、それ程急に返す必要が出て来やうとは思わなかつた。　『道草』五十九

（三）たゞ姉弟から斯ういふ質問を受けやうと予期してゐなかつただけである。　『それから』七

（四）心的状態が絵を構成する上に、斯程の影響を与へやうとは、画家ながら、今迄気がつかなかつた。　『草枕』十二

（一）は、「健三」とその妻の、毎月の生活費のやりくりについての会話で、お金が余るだろうとは健三自身考えていないことを述べたものである。（二）は「健三」が外国に居た際に、衣服を作る必要に迫られ借りたお金を、早急に返さなければならなくなるだろうとは彼自身予想していなかったが、催促状を受け取ったので返す段取りを整えようとする場面である。（三）はお金を借りに行った「代助」にいつ返す気なのか、と問うた「梅子」の言動に対して、そのようなことを聞かれるとは思いもしなかった「代助」の心情である。（四）は「那美」が離縁した夫にお金を渡す場面を目の当たりにした「余」の心情である。絵を描く上で、心理的なものがどれほどの影響を自分に与えるだろうということを知らなかった、というものである。

これらは全て、現在では一般的に〈動詞の終止形+だろう〉の形に置き換えることができる。

次に「だろう」の用例を挙げる。

（五）読めない所は其儘にして置いて、読める所丈眼を通しても、自分のまだ知らない事実が出て来るだらうといふ興味が、少なからず彼女の好奇心を唆った。　『道草』三十二

（六）「荷物もそのうち着くだらう。（略）」　『それから』五

（七）ぢり〳〵見るんだから定めし手間が掛かるだらうと思つたら大間違ひ。　『坑夫』

（八）「寐られないと、何かして寐よう〳〵と焦るだらう」と私が聞きました。　『行人』塵労三十五

（五）は自分の知らない事実が、読める所からだけでも出て来るだろう、という推測である。（六）は荷物がいつか着くことを推測している。（七）は茶店で休もうかと思っていたら、

そこにいた「男」にじろじろと見られ、その目の動きを「じりじり」と表現したものであるが、じりじり見るのだから時間がかかると思うだろうがそうではない、というものである。（八）は「寝られない」という兄に、そのことが兄にとって一番辛いと思う私が兄の気持ちを推量している場面である。

以上、動詞に接続する終止用法の「う」と「だろう」の用例を挙げたが、（一）から（八）までは全て現在推量の用法である。そのため、（一）から（四）の「う」（「よう」）を、「だろう」に置き換えることは困難ではない。更に、（一）（二）（五）や（三）（六）のように、同作品中で「う」（「よう」）と「だろう」が混在していることからも、動詞の現在推量における「う」（「よう」）は次第に「だろう」に移行しつつあったことが理解できる。

次に、過去推量における「う」（「よう」）と「だろう」を見てみたい。活用語に接続する過去推量の表記には「たろう」と「ただろう」の二通りがある。

（九）それだから尊いのかも知れないが、もし間違へて裏へ出たとしたら、何んな結果が二人の仲に落ちて来たらう。

『こゝろ』上　先生と私七

（十）私は朝飯とも午飯とも片付かない茶碗を手に持つた儘、何んな風に問題を切り出したものだらうかと、そればかりに屈託してゐたから、外観からは実際気分の好くない病人らしく見えただらうと思います。

『こゝろ』下　先生と遺書四十四

これらは、過去の出来事を推量する形で用いられているが、このように、同作品中において、推量表現は「たろう」と「ただろう」の二種類現出している。前者が古い形であり、後者においては次第に顕著になったように見受けられる。

【別表一】は「だろう」が過去形の活用語に接続する場合の一覧である。

作品名別に年代順に横に並べ、活用語に「う」が接続する語と、「だろう」が接続する語をそれぞれ分類した。

一見してわかるとおり、過去推量で用いる場合は「う」を選択する傾向にあるようだ。しかしながら「だろう」もわずかながら存在していることから、両者の選択に何らかの基準があるか否かを確認する。

まず、「たろう」の用例を挙げてその用法を確認する。

（一一）「了念さん。どうだい、此間あ道草あ、食つて、和尚さんに叱られたらう」

『草枕』五

（一二）もし私の好奇心が幾分でも先生の心に向つて、研究

【別表１】

	年代	1905	1905	1906	1906	1906	1907	1907	1908	1908	1909	1910	1910	1912	1912	1914	1915	1915	1916	1910	1911	1911
	作者名	夏目漱石	夏目漱石	夏目漱石	夏目漱石	夏目漱石	夏目漱石	夏目漱石	夏目漱石	夏目漱石	夏目漱石	夏目漱石	夏目漱石	夏目漱石	夏目漱石	夏目漱石	夏目漱石	夏目漱石	夏目漱石	森鷗外	森鷗外	森鷗外
	作品名	吾輩は猫である	倫敦塔	坊ちやん	草枕	二百十日	野分	虞美人草	坑夫	三四郎	それから	思ひ出す事など	門	彼岸過迄	行人	こゝろ	硝子戸の中	道草	明暗	青年	雁	百物語
「う」がつく語	動詞	あった(2)	あった(2)		あった			あった(2)		あった		あった(2)				あった(2)	あった		あった(2)			
		した(2)				した(2)	した(2)	した(2)	した				した	した	した	した			した			
								いた	いた(3)	いた				いた	いた				いた(2)			
		来た(2)					来た									来た			来た			
		困った				困った	困った		困った(2)													
		なった					なった		なった				なった		なった							
		分かった				分かった		分かった(2)	分かった(2)						解った							
										出来た						出来た		出来た				
		驚いた					驚いた	驚いた			驚いた											
		行った							行った													
		恐れ入った(2)					恐れ入った															
		とった									取った											
					なすった						なすった											
									見えた					見えた								
									もらった										もらった			
		中った																	当たった			
		利いた		利いた	叱られた	下がった	洩らした	聴いた	草臥れた	与えた	辰した	厭きた		映じた	聞こえた	離った			言われ			
		暮れた		落ちた	目付かった	痩せた		変わった	悟れた	片付けた(2)	計った			思った	弱った				言ってた(2)			
		減った		言った				着いた	済ました	蒸えた	待った			さった					聞いた			
		見た		乗った				書けた	出来上がった	経った									断った			
								疲れた	疲れた	貰った									させた			
								認めた	やった													
	形容詞				なかった		なかった	なかった	なかった				なかった	なかった	なかった		なかった(2)		なかった(3)			
											よかった		よかった			よかった						
		辛かった		うまかった	美しかった				嬉しかった					暑かった	痛かった			楽しかった				
									面白かった					高かった								
	助動詞	なかった(2)					なかった		なかった	なかった	なかった(2)	なかった(3)	なかった			なかった		なかった(2)	なかった(4)			
	です・ます	でした(2)		でした	でした			でした(4)							でした(3)	でした(5)	でした(3)	でした	でした(2)			
		ました		ました(2)				ました					ました	ました	ました							
「だろう」がつく語	動詞																いた	いた		いた	いた(2)	
					打たれ												行った		答えた	言った	言った	
																	見えた			帰った	あった	
																				聞いた	しまった	
																				した	なった	
																					働いた	
	形容詞																			なかった		なかった
	助動詞																			なかった		

※「だろう」の「です・ます」はなし。（　）内の数字は現出回数

的に働らき掛けたなら、二人の間を繋ぐ同情の糸は、何の容赦もなく其時ふつりと切れてしまつたらう

『こころ』上　先生と私七

（一三）それでも内蔵造の家が狭い町内に三四軒はあつたらう。

『硝子戸の中』十九

（一四）泣けない迄も、相手の心をもつと満足させる事が出来たらう。

『道草』六十三

（一五）「そりやもうお延さんから聴いたらう」

『明暗』百十六

（一一）は「道草をくったことを和尚さんに叱られた」、と話し手が過去の出来事を推量している。（一二）は「私」が「先生」宅へ足しげく通った理由を、後に本人が述懐しているところである。（一三）は「私」の旧宅のあたりの説明である。（一四）は「御常」の身の上話を聞いた後、そっけない受け答えをしただけの「健三」の気持ちである。（一五）は津田に「然し君は一体どんな事を云って、彼奴に調戯ったのかい」と聞かれた小林の発言である。（一一）から（一五）は、古い形の過去推量であるが、これら五作品は【別表二】からもわかるとおり「ただろう」と併用されている。

（一六）もし此親方の人格が強烈で四辺の風光と桔抗する程の影響を余の頭脳に与へたならば、余は両者の間に立つて頗る円枘方鑿の感に打たれただらう。

『草枕』五

（一七）私は朝飯とも午飯とも片付かない茶碗を手に持つた儘、何んな風に問題を切り出したものだらうかと、そればかりに屈託してゐたから、外観からは実際気分の好くない病人らしく見えただらうと思います。

『こころ』下　先生と遺書四十四

（一八）私の罪は、――もしそれを罪と云ひ得るならば、――頗ぶる明るい処からばかり写されてゐただらう。

『硝子戸の中』三十九

（一九）何んな未来の希望に支配されてゐただらう。

『道草』八十九

（二〇）「相手？　何んな相手ですか」と訊かれたら、お延は何と答えただらう。

『明暗』百十二

これらは、過去の出来事を述懐している形式なので、いずれも過去推量である。ここで二種の推量の助動詞に使い分けがあるのか否かについてみると、「たろう」も「ただろう」もどちらも過去推量を表し、意味の上で大きな変化はないようである。現在推量が「う」から「だろう」に移行するに伴って、過去推

量においても「たろう」から「ただろう」に交替しつつあると考えられないだろうか。

漱石の作品では、「たろう」と「ただろう」の併用が見られたが、森鷗外の三作品『青年』、『雁』、『百物語』においては、この種の併用は見られない。鷗外は以下の通り過去推量を表す場合には、専ら「ただろう」形を用いている。

（二一）若し己が強烈な意志を持つてゐたならば、此時席を蹴て起つて帰つただらう。　『青年』十五

（二二）「あんな本を読んだ跡だからねえ、僕はさぞ馬鹿げた顔をして歩いてゐただらうと思ふよ」と、岡田は云つた。　『雁』拾玖

（二三）察するに飾磨屋は僕のやうな、生れながらの傍観者ではなかつただらう。　『百物語』二七一

（二一）は「純一」の日記の中の言葉である。「奥さん」とのやりとりから次第に彼女が憎く思え、「この時席を蹴て起って帰っただろう。」という心境に至る。「若し～ならば」とあるので、実際はそうしたわけではない。「強烈な意志」があればそうした、という推測である。（二二）は自分の顔が他人にどのように写ったかを推測している。（二三）は「飾磨屋」という男が「うまれながらの傍観者ではなかった」はずが、今となっては自分と同じ「傍観者」となっているように見える、という内容である。これも過去の「飾磨屋」のあり方を推測している。

また、このことについて圓朝全集によって調べてみた。（【別表二】）

この表では作品別に「たろう」が接続する語、「ただろう」が接続する語をそれぞれ分類した。この表に見られるように『真景累ケ淵』において、「たろう」と「ただろう」の併用がみられる。

［たろう］

（二四）新「ごろり一寸寝るばかりだ、永らく寝る目も寝ずに看病したらうぢやアないか其義理にも一寸枕を並べて、直ぐに出て行くから、　（十）

（二五）新「本当にあんな事を云はれると厭なものでね、私は男だから構ひませんが、お前さんは嘸腹が立つたらうがお母さんには黙つて。　（十八）

［ただろう］

（二六）甲「どうしてあの人はあんな死様をしただらうか」　（十一）

（二七）花「ぢやア旦那が刀を抜いて切合つた処をお前さんは見ただらうねえ。　（六十七）

【別表2】「う」「だろう」別活用語接続一覧

	年代	1871	1885	1885	1888	1889	1892	1895		
	作者名	三遊亭圓朝	三遊亭圓朝	三遊亭圓朝	三遊亭圓朝	三遊亭圓朝	三遊亭圓朝	三遊亭圓朝	三遊亭圓朝	三遊亭圓朝
	作品名	菊模様皿山奇談	業平文治漂流奇談	西洋人情話英国孝子ジョージスミス之伝	真景累ヶ淵	根岸お行の松 因果塚の由来	政談月の鏡	名人長二	松と藤芸妓の替紋	敵討札所の霊験
「う」がつく語	動詞	あった(4)		有った	あった(2)		あった			有った(2)
		した(3)		した	した(2)				した	
		なすった			なすった	なすった			なすった	
		見た								
		骨が折れた								
		誉めた								
		出た			出た					
		来た			来た(2)					
		居た					居た			
				なった	なった					
			殺した(2)		殺した					
					取った(2)					
					困った			困った		
		立ってた	育てた	出来た	殺させた	分かった		旨かった	付いた	貸した
		止まった	斬った		空いた	使った		上げた		聴いた
		経った			遣った	使っちまった				言った
					匿った	つかした				忘れた
					言うた					
					腹が立った					
	形容詞									
	助動詞							なかった		
	です・ます	ました(6)	ました(7)	ました(2)		ました でした		ました	ました(3)	ました(2)
「だろう」がつく語	動詞				した 見た					
	形容詞									
	助動詞									
	です・ます									

( )内の数字は使用回数

（二四）は「新五郎」が「園」に、以前看病してあげたのだからちょっと一緒に床に寝かせてくれと頼む場面である。（二五）は「豊志賀」の見舞いに「久」がやってきた際、「豊志賀」に「新吉」が目当てで見舞いに来るのだろう、と責め立てられたことを、後日「新吉」が「久」の気持ちを汲んで「腹が立ったろう」、と発言しているところである。

一方「ただろう」で現出するのは（二六）（二七）の二例であるが、（二六）は因縁の例え話として、「甲」と「乙」が会話を交わしている。また（二七）は「旦那」の供としてついていた「富」が嘘をついていて、そのことを知っている「花」が切り合いの様子を確認している場面である。どちらも話者の推量というよりは、相手に問いかける形で用いられている。速記本という性質上、必ずしもこれが正確なものであるとは断定できない。しかしながら、圓朝が活躍した時代には既に、「ただろう」形は存在し、その用法は、過去推量というよりも、相手に問いかける形であったと考えられる。

以上から、動詞に接続する終止用法での推量の助動詞は、「う」から「だろう」に移行しつつあると見られる。しかしながら、漱石作品では圧倒的に「う」が採用され、「だろう」が用いられている例は見当たらない場合がある。形容詞「よい」の場合について見ると次のようである。

（二八）夫から其方が又実際母の心配する通り、兄夫婦にも都合が好からうと真面目に考へても見た。

『行人』帰ってから九

（二九）さう容易く下宿生活に戻る位なら、始めから家を持たない方が善からう。

『三四郎』六

（三〇）医者の許可を得たのだから、普通の人の退屈凌ぎ位な所と見たらよからうと余は弁解した。

『思い出すことなど』四

（二八）から（三〇）のように「よい」と読む場合には「う」が用いられ、「よいだろう」という形は見受けられなかった。これについて、この調査で比較的多く現出した「ない」を例にとって考察したい。

「ない」は接続する語句によって形容詞としての用法と、助動詞としての用法の二つに分けることができる。次頁の【別表三】は〈ない＋う〉の「なかろう」、〈ない＋だろう〉の「ないだろう」、そしてそれぞれの否定的過去推量「なかったろう」「なかっただろう」を形容詞と助動詞の用法に区別し、その用例数を表わしたものである。

[別表3]「ない」の用法別一覧

			なかろう		ないだろう		なかったろう		なかっただろう	
年代	作家	作品名	形容詞	助動詞	形容詞	助動詞	形容詞	助動詞	形容詞	助動詞
1905	夏目漱石	吾輩は猫である	23		7	3		2		
1905	夏目漱石	倫敦塔								
1906	夏目漱石	草枕	5							
1906	夏目漱石	二百十日			2	1				
1906	夏目漱石	坊つちやん	9		3	1				
1907	夏目漱石	野分	6		1	1	1	1		
1908	夏目漱石	文鳥	3							
1908	夏目漱石	坑夫	7		1	1	1	1		
1908	夏目漱石	三四郎	9	1	4	3		1		
1908	夏目漱石	夢十夜	5							
1909	夏目漱石	それから	12	1	3	3		2		
1910	夏目漱石	思ひ出す事など	6			3		3		
1910	夏目漱石	門	9	1	1	1	1	1		
1912	夏目漱石	行人	23	1	6	5	1			
1912	夏目漱石	彼岸過迄	24		1	4	1			
1914	夏目漱石	こゝろ	27	1	4	5		1		
1915	夏目漱石	硝子戸の中	3		1	4	2			
1915	夏目漱石	道草	8		4	1		2		
1916	夏目漱石	明暗	23	1	8	8	3	4		
1910	森鷗外	青年	1		2	4			2	1
1911	森鷗外	雁				2				
1911	森鷗外	百物語				2			1	

空欄は[0]を表す

二―二．形容詞「ない」に接続する場合

この項では、形容詞としての「ない」に推量の助動詞が接続した場合、「う」と「だろう」のどちらが採用される傾向にあるかを考察する。

【別表三】からは、形容詞の「なかろう」が頻出していることがわかる。

（一）癒らない事もなからうと云ふのである　『三四郎』七

（二）商買をしたつて面倒くさくつて旨く出来るものぢやなし、ことに六百円の金で商買らしい商買がやれる訳でもなからう。　『坊つちやん』二

（三）津田はまさかお秀が又来る訳でもなからうと思つた。　『明暗』百二十

（四）「大した事もなからうと思ひますが、段々勧める人もありますから」　『野分』十二

（五）岡田も母の返事の来るまで自分に居て貰ふ必要もなからうと云つた。　『行人』友達十一

（六）「よくないたつて、僕のような一文なしぢや外に何も置いて行くものがないんだから仕方がなからう」　『明暗』百五十七

（一）は母から「三四郎」へ届いた手紙の文面で、「三四郎」は度胸がないから度胸が据わる薬でも作ってもらって飲めば治るだろう、という内容のものである。（二）は両親を亡くした「坊つちやん」に遺産として兄が渡した六百円の使い道を考えている場面だが、六百円では商売もできないだろうと考えている。（三）は「お秀」が「吉川」へ行って何を話したか、「小林」に聞いた「津田」であったが、「小林」にわからないと言われ、失望したところに「小林」がもう少し待てば聴くことができる、と告げたときの「津田」の心境である。待ったところでまさか「お秀」がやってきて、本人から内容を聞くことはないだろうと考えているのである。（四）は体が悪いのか、と聞かれた事に対する返答である。大したこともないだろうが、転地を勧める人があるから暇乞いをしたい、ということである。（五）は「佐野」と「お貞」の結婚を勧める手紙を母に向けて書いて「岡田」に預けた「自分」に対して「岡田」がその返事が来るまで大阪に滞在する必要はない、と言ったものである。（六）は一文無しなので、外に置くものがなくても仕方が無いと言っている。

これらの「なかろう」は「ないだろう」で表されるのが一般的である。形容詞の「ないだろう」には次の用例がある。

（七）「あれ程に人工的なものは恐らく外国にもないだらう。（略）　『三四郎』四

（八）「（略）夫で愈となつたら、温泉の町で取つて抑へるより仕方がないだらう」　『坊つちやん』十一

（九）「掛けても構はないが、何も今に限つた事はないだらう。　『明暗』四十一

（七）は菊人形を褒める「広田先生」の発言である。（八）は「赤シャツ」の鼻を明かそうとする「山嵐」と「坊つちやん」の作戦である。（九）は手術をした「津田」のことを妹に知らせなかったと責められるのは嫌だという「お延」へ「津田」が用いた台詞である。妹が騒ぐのは、今に始まったことではない、という内容である。

（六）と（八）は同じ「仕方が無い」という語句に対して、「なかろう」、「ないだろう」の両方の用例が存在しているが、双方を比較しても意味の上で差異はないことがわかる。しかし、形容詞「ない」を現在推量で用いる場合は、まだ「だろう」よりも「う」の方を採用する傾向にあったと見られる。

それでは形容詞「なかろう」の過去形「なかったろう」の用法を見ることにする。

（一〇）だからそれ丈の事ならば、針だらうが刺だらうが、頓着はなかつたらう。　『坑夫』

（一一）恐らく訊いて見た事もなかつたらう。　『硝子戸の中』三十一

（一二）中野君が斯様な人であつたなら、出鼻をはたかれても左程に口惜しくはなかつたらう。　『野分』二

（一〇）は疲れて寝ているところを南京虫に刺された描写である。本人は夢現の中で、まだそれが南京虫だとは気が付いていない。したがって「頓着はなかった」。（一一）は、友達の「喜いちゃん」に両親がいないことの理由を「訊いて見た事もなかった」と述懐する部分である。（一二）は「中野」が議論を展開したいときに、話を終らせるような人間であったら「口惜しくはなかった」と考えている。

漱石の作品中では、形容詞の「なかっただろう」が用いられることはなかったようである。このことから、形容詞「ない」の現在形では「う」から「だろう」への移行が見られるものの、過去形においてはそのような移行は見られず、「う」がそのまま保存されていることがわかった。

二―三．助動詞「ない」に接続する場合

終止用法の形容詞「ない」では、現在形では「う」と「だろ

う」が併用されていたが、過去形においては「う」が採用されているようであった。動詞に接続する場合と同様、現在形では「う」から「だろう」に移行しているようであるが、過去形は移行しにくいのであろうか。

この項では、形容詞「ない」に引き続き、助動詞の用法である「ない」について「う」「よう」と「だろう」のどちらが選択される傾向にあるかを考察する。

【別表三】からは助動詞「なかろう」の用例はあまり見られないことがわかる。

（一）だけど何うせ彼奴のことだから碌な事は云やしなからう。　『明暗』百四十六

（二）奥さんは、自分さへ承知してゐれば、いつ話しても構わなからうといふやうな事を云ふのです。　『こころ』下　先生と遺書四十五

（一）は「小林」は「お延」に「碌な事」を言わないだろうと「津田」が発言している箇所である。現在では「云やしなかろう」は「云やしないだろう」に言い換えられる。（二）は「先生」が「奥さん」に「御嬢さん」をもらう話をつけた後、本人にいつ伝えてくれるのか、質問した際の返答である。ここでも「構わなかろう」は「構わないだろう」となり、助動詞「なかろう」が動詞に接続する場合は少なからず違和感がある。また、圓朝でも次のような例がある。

（三）男「（略）雪催しだから大方来なからう（略）」　『西洋人情話　英国孝子ジョージスミス之伝』五

（四）勘「（略）又新吉さんが煙草屋をして居ては足りなからうから（略）」　『真景累ケ淵』十九

これらも（一）（二）と同様に現在では（三）「来ないだろう」、（四）「足りないだろう」と表現されると考える。

現在推量で助動詞「ない」を用いる場合、（一）から（四）の用例から元来は「う」が採用されていたと見られるが、「だろう」の出現により、徐々に助動詞の「なかろう」形は衰退し、代わりに「ないだろう」が用いられるようになったと考えられる。以下に「ないだろう」の助動詞としての用例を挙げる。

（五）私はその話を聞いた時、心の内でもう御作に会ふ機会も来ないだらうと考へた。　『硝子戸の中』十七

（六）月のない坂を上つて、瓦斯燈に照らされた砂利を鳴らしながら潜戸を開けた時、彼は今夜此所で安井に落ち合ふ様な万一はまづ起らないだらうと度胸を据ゑた。　『門』二十二

（七）「君其様子ぢや当分約束を履行する訳にも行かない

だらう」　『行人』友達十五

（五）は、芸者の「咲松（御作）」が客にひかされたので、会うことはないだろうと考えたという内容。（六）は「宗助」が「坂井」宅まで行った際に、「安井」に会うようなことはないだろうと推測している場面である。（七）は「三沢」の病気が良くなる気配がないので、約束を守れないだろうと発言したものである。（五）を「来なかろう」としたり、（七）を「行かなかろう」という風に表現することは現代語では考えにくい。

このことから、助動詞「ない」を用いる際、現在推量においては、徐々に「う」から「だろう」に移行していることが推測できる。

それでは過去推量ではどうだろうか。

（八）けれども、代助は、二人とも自分程には感じなかつたらうと考えた。　『それから』八

（九）逃亡はするが、紳士の逃亡で、人だか土塊だか分らない坑掘になり下る目的の逃亡とは、何不足なく生育つた自分の頭には影さへ射さなかつたらう。　『坑夫』

（一〇）もしその間に身体の楽に出来る日曜が来たなら、ぐたりと疲れ切つた四肢を畳の上に横たへて半日の安息を貪るに過ぎなかつたらう。　『道草』三

（八）は「婆さん」も「門野」も「代助」ほど地震を感じなかった、と思っている箇所である。（九）は何不自由なく育った自分が坑夫になるために逃亡するとは考えもしなかったという場面である。（一〇）は休息をとるはずだったのにできなかったということである。これら（八）から（一〇）の「なかったろう」の用法には、（一）から（四）に見られるような違和感はない。

また、過去推量については、形容詞「ない」と同様、助動詞「ない」も「なかっただろう」は見られなかった。このことから、助動詞「ない」においても、「ない」の過去形に「だろう」は接続しにくく、「う」がそのまま保存される傾向にあると言えるだろう。

ただし、漱石と同時代に活躍した森鷗外の作品には次の用例がある。

（一一）若しお雪さんが来なかつたら、己は部屋を出るとき、ラシイヌを持つて出なかつただらう。　『青年』十五

（一二）察するに飾磨屋は僕のやうな、生れながらの傍観者ではなかつただらう。　『百物語』二七一

（一一）は助動詞として「ない」が用いられており、（一二）

は形容詞として「ない」が用いられていることがわかる。どちらの側も「なかったろう」と比較して、意味の上で差異はない。東京で生まれ育った漱石の作品には表されることがなく、東京出身者でない鷗外の作品には表されるところを見ると、当時東京ではすでに「なかっただろう」という形が口語として用いられていたと考えられる。

これまでの考察から、終止用法として動詞に接続する推量の助動詞は、「う」から「だろう」に移行していると考える。また、形容詞「ない」に接続する場合は、現在推量の形では徐々に「う」から「だろう」に移行しているといえる。それに対して、助動詞「ない」では「う」はすでに衰退し、「だろう」に交替したように見受けられる。過去形においては、形容詞の「ない」と助動詞の「ない」は両方とも、「だろう」が接続しにくく表記の上では「う」が保存されたと考える。

第三章　疑問用法における「う」と「だろう」

次は、疑問用法として推量を用いる場合は、「う」と「だろう」のどちらが使われる傾向にあるかを見る。終止用法の項と同様に、動詞に接続する場合、形容詞「ない」に接続する場合、助動詞「ない」に接続する場合のそれぞれを考察する。

三―一・動詞に接続する場合

まずは「う」から見ていくが、疑問形を表わす場合は、大抵の場合、助詞「か」が下接する。

（一）其の速い事と云つたら、言語に絶すると云はうか、電光石火と評しやうか、実に恐ろしい位だつた。

『坑夫』

（二）砧に濤たれた布は、斯うもあらうかと迄考へた。

『思い出す事など』十八

（三）「それを勉強すると博士になれませうか」と聞く。

『吾輩は猫である』三

（一）は疑問形が並列的になった形である。（二）自分の動かない体を例えたものであるが、「こうもあろうか」は「このようであろうか」である。（三）の「なれませうか」は「なれようか」の丁寧な言い方である。「ます」に推量の助動詞が接続しているのだが、これは第五章で述べることとする。

このように、疑問形で「う」を選択する場合は、（一）のように並列的になるか、（二）のように「であろうか」となるか、または（三）のように敬語表現で用いられるようだ。

「う」が頻繁に疑問的な用法で用いられるのに、以下のような反語表現がある。

（四）どうして自分より大きな意識と冥合出来やう。

『思い出すことなど』十七

（五）けれども天の手際で旨く行かないものを、何うして僕の力で纏める事が出来やう。

『彼岸過迄』松本の話一

（六）其所に何で共通のものがあらう。

『硝子戸の中』二十七

（四）は、一度死んだ「余」は個性と意識を失ったのみで他に何も変化がなく、そんな状態では「大きな意識と冥合出来ない」ということである。

（五）は、「市蔵」と「千代子」の仲を上手く取り持つことを、天ができないのに、自分にできるわけがない、ということである。（六）は、「凡ての芸術は同じ源から湧いて出る」と言った相手に対して、「芸術は平等観から出立するのではない」のだから、共通のものなどない、という主張である。このように、（四）から（六）は、直接相手に問いかけるというよりも、反語として用いられている。

続いて、「だろう」の疑問形について見ることにする。その場合、助詞「か」を取ることも取らないこともある。

（七）彼は机の上にあつた重い文鎮を取つて、突然是で人が殺せるだらうかと尋ねた。

『彼岸過迄』須永の話二十七

（八）ある時抔は清にどんなものになるだらうと聞いてみた事がある。

『坊っちゃん』一

（九）Hさんは今夜彼と何んな話をするだらう。

『行人』塵労二十七

（一〇）気の毒がるだらうか、泣くだらうか、それとも浅間しいと云つて愛想を尽かすだらうかと疑つてみたが、是は難なく気の毒がつて、泣くに違ないと結論して仕舞つた。

『坑夫』

（一一）もし筆を執らなかつたら、彼は何をする能力があるだらう。

『それから』十五

（八）は自分が「どんなものになるか」質問している。（九）は「どんな話をするか」疑問を抱いている。（一一）は仕送りを止められたとしても、友人のように筆を執って自分の力で生きていけるだろうか、筆を執らなければ他に何も能力はない、ということを表わしている。

（七）は「う」の時同様に、疑問を表わす助詞「か」が下接

ら（六）のような反語の働きは見受けられなかった。

また「ただろう」の疑問形は漱石の作品中では見当たらなかったが、鷗外の作品中には次のように表わされていた。

（一五）けさ内へ帰る時は、ちつとも早くあの人に逢ひたいと思つたが、あの時逢つたら、わたしはなんと云つただらう。　『雁』拾肆

以上のことから、疑問形を表わす過去推量の場合は、まだ「う」が残されていることがわかる。

三―二．形容詞「ない」に接続する場合

「う」が、形容詞の「ない」に接続して疑問形を表わす場合は、助詞が下接していることがわかる。

（一）三四郎は自分の感受性が人一倍鈍いのではなからうかと疑ひ出した　『三四郎』七

（二）熱さへ出ればすぐ産褥熱じやなからうかという危惧の念を起した。　『道草』八十二

（三）それで、ねんごろに枕の傍へ口を付けて、死ぬんぢやなからうね、大丈夫だらうね、と又聞き返した。　『夢十夜』第一夜

（一）は美禰子の自分に対する気持ちを量りかねて感受性が

しているが、（八）や（九）のように必ずしも「か」が下接するとは限らないようである。また（一）と同様（一〇）では疑問形が並列している。（一一）のような反語的な用法も「だろう」では確認することができた。

このようなことから、疑問形においても、現在推量の助動詞「う」は次第に「だろう」に移行していると考えられる。

次に過去推量について見ることにする。まずは「たろう」の例である。

（一二）第一鍋、釜、手桶抔という世帯道具の始末はどう付けたらうと余計な事迄考へたが、口に出して云ふ程の事でもないから、別段の批評は加へなかつた。　『三四郎』六

（一三）自分は右の手に握つてゐた診断書を、つい忘れて、おや何処へやつたらうかと、始めて気が附いた。　『坑夫』

（一四）今夜の広田先生は庄司博士に善い印象を与へたらうかと与次郎が聞いた。　『三四郎』九

（一二）は「どう」という語句から、（一三）（一四）は、疑問を表わす助詞「か」が下接していることからも疑問形であることが理解できる。疑問形の「たろう」の用例中には（四）か

鈍いのではないか、と疑っている。（二）は熱を出した妻に対して産褥熱ではないか、と心配する「健三」の気持ちである。（三）は夢の中の女に死ぬのではないね、と問う場面である。

たいていの場合は（一）（二）のように「か」が下接するが、（三）のように終助詞が下接する場合もある。興味深いことに、形容詞「なかろう」を用いる場合は、その用例の殆どが疑問形で、何らかの助詞が下接している。

それでは「だろう」が接続する場合はどうであろうか。

（四）（略）何か好い趣向はないだらうか」と今度は三四郎に相談を掛けた　『三四郎』六

（五）私は不図こゝいらに適当な宅はないだらうかと思ひました。　『こゝろ』下　先生と遺書十

（六）「此奴は懐から短銃を出すんぢやないだらうか（略）」　『明暗』百六十三

（四）から（六）はどれも助詞に下接し、疑問形を表わしている。（六）は（二）で見られる形が「だろう」に変化したものだと考えられる。ここでも「う」に替わって「だろう」が台頭しつつあるように思われるが、漱石作品では疑問形における形容詞「ない」の場合、「う」が保存される傾向にあるようだ。

続いて過去推量の「たろう」の例である。

（七）昔し「影参差松三本の月夜かな」と咏つたのは、或は此松の事ではなかつたらうかと考へつゝ、私はまた家に帰つた。　『硝子戸の中』二十三

（八）「あたしの居ない留守に何にも用はなかつたらうね」　『明暗』七十七

「たろう」形も何らかの助詞が下接しているのがわかる。動詞に接続する場合は、必ずしも助詞が下接するとは限らないようであったが、「なかったろう」も「なかろう」、「ないだろう」と同様、助詞が下接することで疑問形を形成している。しかしながら、全体から見て「なかったろう」も「ないだろう」も、それぞれ「なかろう」のようにその用法が疑問形に極端に偏るということはないようだ。

「なかろう」が肯定を表わす終止形よりも疑問形として多く現出していたことは興味深い。このことから、形容詞「ない」を疑問形で用いる場合は、「だろう」よりも「う」が選択される傾向にあったと考えられる。しかしながら、（八）のように、「なかろうか」も次第に「ないだろうか」に交替していると考えられる。

次に「なかっただろう」であるが、漱石作品ではこの用例は確認できなかった。鷗外作品には、次のような用例が存在する。

（九）或は彼が自ら愛する心に一線のencensを焚いて遣つた女の記念ではなかつただらうか。『青年』十八

（一〇）暇乞をして出る時には、そんな事を考へる余裕はなかつたが、今になつて思へば、自分が座敷を立つ時、岡村も一しよに暇乞をすべきではなかつただらうか。

『青年』二十四

この時点では、疑問用法における推量は「う」の形が多いのだが、鷗外の作品に現出したように、次第に「だろう」に替わりつつあることが推測できる。

三－三．助動詞「ない」に接続する場合

「う」が助動詞「ない」に接続し、疑問形を表わす場合は以下のとおりである。

（一）然し財産が何の位あるんだらうとか、親類に貧乏人があるだらうかとか、或は悪い病気の系統を引いてゐやしなからうかと云ふやうな事になると、自分には丸で答へられなかつた。『行人』塵労二十七

（一）の場合、「あるんだろう」「あるだろうか」と続いて、最後が「しなかろうか」に繋がっている。現代語において、ここは「しないだろうか」とするのが自然である。形容詞「ない」では「う」は疑問形として頻繁に用いられていたが、助動詞「ない」ではその用例はあまり見られない。

一方「だろう」形を見てみる。

（二）漸く寐付いて難有いと思ふ間もなく、すぐ眼が開いて、まだ空は白まないだらうかと、幾度も暁を待ち侘びた。『思い出す事など』二十二

（三）かねてから自分は個々の短篇を重ねた末に、其の個々の短篇が相合して一長篇を構成するやうに仕組んだら、新聞小説として存外面白く読まれはしないだらうかといふ意見を持してゐた。『彼岸過迄』彼岸過迄に就て

（四）彼女はもつと複雑な過去を覿面に感じてはゐないだらうか。『明暗』百七十七

（五）「（略）断はらずに這入つても構はないだらうか」『こゝろ』上　先生と私二十六

（二）から（五）は助詞「か」が下接し、疑問を表わしているのだが、（三）と（五）に関しては、終止形の場合に次のような用例がある。

（六）だけど何うせ彼奴のことだから碌な事は云やしなからう。

『明暗』百四十六

（七）奥さんは、自分さえ承知してゐれば、いつ話しても構はなからうといふような事を云ふのです。

『こゝろ』下　先生と遺書四十五

このように、終止形で用いる場合は「う」が用いられていたものが、疑問形となる場合は「なかろうか」ではなく「ないだろうか」に交替していることがわかる。特に（五）と（七）の用例は同作品中で終止形の場合は「う」、疑問形の場合は「だろう」に変化していることから、疑問形で助動詞「ない」を用いる場合は、「だろう」が用いられていたと考えられる。

続いて「なかったろう」の用例を挙げてみる。

（八）さうして時によると、自分がもし順当に発展して来たら、斯んな人物になりはしなかつたらうかと考へた。

『門』十六

（八）は「宗助」が自分も「坂井」のような人間になっていたのではないか、と考えているのであるが、現在形においても過去形においても助動詞「ない」と「う」が接続して疑問形で用いる用例は、形容詞「ない」に比べて少ない。

また、助動詞「ない」が過去推量で疑問形を表わす用例は確認できなかった。

これまでの考察から、疑問用法として動詞に接続する場合、「う」は並列、もしくは反語的に用いられるようだが、一般的な疑問文としては、「だろう」が用いられていた。また、形容詞「ない」に接続する場合は、助詞が下接することが多く、徐々に「う」から「だろう」に移行しているとはいえ、まだ「う」が多く用いられる傾向にある。ただし、助動詞「ない」では疑問形の「う」は衰退し、「だろう」が交替したように見受けられる。過去形においては両用法とも、「だろう」は接続しにくく「う」が保存されたと考える。

第四章　仮定的用法になる「う」と「だろう」

推量の助動詞には、仮定的条件や選択を表わす場合があるが、その際には「う」と「だろう」のどちらを用いる傾向にあるのだろうか。動詞に接続する場合、形容詞「ない」に接続する場合、助動詞「ない」に接続する場合のそれぞれを考察する。

四―一・動詞に接続する場合

仮定的条件の場合は、以下の用例がある。

（一）それは小六づかしい理窟だから、仮令何んな要求か

ら起らうと敬太郎の為に弁ずる必要はないが、此頃になつて偶然千代子の結婚談を耳にした彼が、頭の中の世界と、頭の外にある社会との矛盾に、一寸首を捻つたのは事実に相違なかつた。

『彼岸過迄』須永の話一

（二）所が叔父の意見によると、あの屋敷は宗助が自分に提供して行つたのだから、たとひ幾何余らうと、余つた分は自分の所得と見做して差支ない。『門』四

（三）今迄はいづこの果で、どんな職業をしやうとも、己れさへ真直であれば曲がつたものは苧殻の様に向ふで折れべきものと心得て居た。『野分』一

（四）「何の為に生れて来やうと、余計な御世話だ。（略）

『それから』十一

（五）もし腕力に訴へたなら三尺の童子も吾輩を自由に上下し得るであらうが、体面を重んずる点より考へると如何に金田君の股肱たる鈴木蔭十郎其人も此二尺四方の真中に鎮座ます猫大明神を如何ともする事が出来ぬのである。『吾輩は猫である』四

（一）は「仮令何んな要求から起ろうと」と、仮定の話をしている。（二）は「たとい幾何余ろうと」それは自分の所得だという意見。こちらも仮の話である。（三）は「何んな職業をしようとも」、と例え、（四）は寝てばかりいるので、「何の為に生まれてきたのだったか」を問われた時の返答で「何の為に生れて来ようと」とある。理由はどうあろうと、ということである。（五）は腕力に訴えれば「吾輩」を自由にできた、という仮定の話である。このように、いずれも仮定的条件を表わす際、「～うと～」もしくは「～うが～」という形を用いていることがわかる。

それでは仮定的条件が並列された場合の「う」を見てみる。

（六）「（略）おれの月給は上がらうと下がらうとおれの月給だ」『坊つちやん』八

（七）結果は悪名にならうと、臭名にならうと気狂にならうと仕方がない。『野分』八

（八）だから何所に音楽会があらうと、どんな名人が外国から来やうと聞きに行く機会がない。

『それから』二

（九）其弱点が事実であらうとも仮設的であらうとも、それはお延の意とする所ではなかつた。

『明暗』百二十六

（一〇）野だの様なのは、馬車に乗らうが、船に乗らうが、

凌雲閣へのらうが、到底寄り付けたものぢやない。

『坊つちやん』五

（六）から（一〇）はいずれも仮定の話であって、並列的に表記されている。仮定的条件と同類で「〜うと〜うと」か「〜うが〜うが」の形を用いている。

仮に、この「う」を「だろう」に置き換えてみた場合、（一）「仮令どんな要求から起るだろうと」（五）「上下し得るであるだろうが」（六）「上がるだろうと、下がるだろうと」（一〇）「馬車に乗るだろうが、船に乗るだろうが」となり、現代語においても違和感を覚える。つまり、仮定的な用法で、助詞「と」や「が」が下接する場合、推量の助動詞は「だろう」に推移せず「う」のまま用いられているということになる。

四－二．形容詞「ない」に接続する場合

四－一では推量の助動詞は「だろう」に移行せず、「う」に留まっていることが確認できた。それでは形容詞「ない」の場合はどうであろうか。

（一）「執念深からうが、男らしくなからうが、事実は事実だよ。」

『道草』百

形容詞「なかろう」の用例では（一）が確認できたが、仮定的用法で用いられる場合、「なかろう」は「まい」で表わされることもあるようだ。

（二）「向うに義務があらうとあるまいと、此方に必要があれば此方で行くだけの事だ」と私が答へます。

『行人』塵労四十

（三）たとひ違約であらうとあるまいと、津田を代表して、小林を撃退する役割なら進んで引き受けないとも限らなかつた。

『明暗』百五十四

（一）から（三）はいずれも仮定的用法であるが、（二）は「義務があろうとなかろうと」に、（三）は「違約であろうとなかろうと」に変換が可能である。いずれも「〜うが〜うが」や「〜うと〜うと」の形で用いられる。一方、仮定的用法での形容詞「ない」に接続する、「なかったろう」「ないだろう」「なかっただろう」の各用例は確認できなかった。動詞に接続する場合と同様に、形容詞「ない」でも、推量の助動詞は「だろう」へ移行せず「う」で留まっていることが窺える。

四－三．助動詞「ない」に接続する場合

動詞、形容詞「ない」に接続する場合には、仮定的用法では「だろう」に移行せず、「う」に留まっていることがわかった。

それでは助動詞「ない」の場合はどうであろうか。

（一）もし先生を連れて行かなからうものなら、先生果して来ない。　『三四郎』十二

（二）然し嘸御痛い事でげせうと云ふから、痛からうが、痛くなからうがおれの面だ。　『坊つちやん』十一

（三）上になつた目が、平岡に都合が悪からうと、父の気に入らなからうと、賽を投げる以上は、天の法則通りになるより外に仕方はなかつた。　『それから』十四

（四）「他人が不安であらうと、泰然としてゐなからうと（略）」　『虞美人草』十八

（一）はもし先生を連れて行かなかったのなら、という仮定的条件を表わしている。（二）は「痛かろうが、痛くなかろうが」で、仮定的条件を、（三）も（二）と同様に「平岡に都合が悪かろうと、父の気に入らなかろうと」で仮定的条件を表わしている。（四）は「あろうとなかろうと」という形で現代でも用いられる。（一）で「もし先生を連れて行かなかろうものなら」としているのは、現代語では「もし先生を連れて行かなかったなら」となり、「もし」があるために推量の働きはなくても仮定的意味は通じる。むしろ、推量の働きは無い方が混乱を免れるようにも思えるため、なぜここで「なかろう」が用いられたのかは疑問である。とはいえ、これまでの用例と同じく「〜うが〜うが」「〜うと〜うと」の形がとられている。

先に述べたとおり、助動詞「ない」には「だろう」が選択される傾向にあることを考えると、それぞれ（一）「行かないだろうものなら」（二）「痛かろうが、痛くないだろうが」（三）「平岡に都合が悪かろうと、父の気に入らないだろうと」に変化するべきなのかもしれないが、現代語では違和感がある。つまり、仮定的用法では推量の助動詞が活用形に接続する場合、「だろう」が「う」に取って替わることはないようだ。

以上のように、仮定的用法において、助詞「と」や「が」が下接する場合、推量の助動詞は「だろう」に推移せず「う」のまま用いられているということがわかった。また形容詞「ない」、助動詞「ない」においても、「う」が用いられており、二章や三章で次第に「う」から「だろう」に移りつつある推量表現が、仮定的用法の場合は「う」が保存されることがわかった。

第五章　「です」「ます」に接続する推量形

第三章で以下の用例を挙げた。

（一）「それを勉強すると博士になれませうか」と聞く。
『吾輩は猫である』三

これは、〈ます＋う＋か〉で「ましょうか」の疑問形を表しているのだが、「う」は「です」「ます」に接続する形が多く見受けられる。

（二）「まあ寐て入らつしやい。寐ていても話は出来ませう」と、さも気作に云ふ。
『草枕』四

（三）「（略）あの冷評のうちには君が恋を求めながら相手を得られないといふ不快の声が交つてゐませう」
『こゝろ』上　先生と私十二

（四）昔しある人当時有名な禅師に向つて、どうしたら悟れませうと聞いたら、猫が鼠を覘ふ様にさしやれと答へたさうだ。
『吾輩は猫である』五

（二）は女の台詞で、「寝ていても話はできるだろう」、という内容を丁寧に表現したもので終止用法である。（三）も（二）と同じく終止用法で「交じっています」が推量の表現となったものである。（四）は「どうしたら悟れるだろうか」で、疑問用法である。いずれも「ます」に推量の助動詞「う」が接続して「ましょう」と表している。「だろう」を接続させて（二）の「出来ましょう」を「出来ますだろう」にしたり、（三）の「交じっていましょう」を「交じっていますだろう」とは表現しない。このように、現在形において「ます」に接続する場合は「う」が用いられる。

また、過去形の場合も同様に、「う」が用いられている。

（五）「じやこれ限にしますが、男と女の名前は分りましたらう」
『彼岸過迄』報告五

（六）「成程それでは大分答へましたらう、全く本人の為にもなる事ですから」と御客さんは如何なる当り方か承らぬ先から既に金田君に同意してゐる。
『吾輩は猫である』四

（七）我々が濡れ鼠のやうになつて宿へ帰つたのは、出てから一時間目でしたらうか、又二時間目に懸りましたらうか。
『行人』塵労四十三

（五）は終止用法で「分かりましただろう」とはならずに「たろう」が用いられている。（六）も同じく終止用法で「たろう」が用いられている。（七）は疑問用法で、並列的に「です」と「ます」が用いられているが、いずれの場合も「ただろう」ではなく、「たろう」が用いられている。このように過去形においても、「う」が接続されることがわかった。

次に「です」「ます」が助動詞「ない」と共に用いられる場

合を見るとしよう。

（八）「殿下さまでも利かないでせう。（略）」

『吾輩は猫である』十

（九）「どうですか、あの方は学校へ行つて球ばかり磨いていらつしやるから、大方知らないでせう」

『吾輩は猫である』十

（一〇）「（略）あなたの方では丸で知らなかつたでせうが、○○は最初から気が付いてゐたのです。（略）」

『行人』帰ってから十七

（八）はたとえ「殿下さま」に化けて出てきても効果はないだろう、ということである。（九）は、「富子」が複数からもらったラブレターを見せびらかしていることを「寒月」は知らないだろう、というものである。（一〇）は「父」が「女」に「あなたは知らなかっただろうが…」、と発言したものである。形容詞には「ます」は接続しないので、（八）から（一〇）は「です」に「う」が接続した形である。また、「です」に「だろう」が接続することは考えられない。

助動詞「ない」には「だろう」が接続しやすいが、敬語用法の場合は「ないでしょう」「なかったでしょう」という形で「う」が用いられていた。

以上のように、「です」「ます」に接続する場合には「う」が用いられ、「ましょう」「でしょう」などで表わされる。また助動詞「ない」でも「だろう」がそのまま用いられている例はなく、大抵の場合、「う」が「です」と共に用いられ「ないでしょう」「なかったでしょう」という形になっている。

第六章　まとめ

これまで、終止用法・疑問用法・仮定的用法・「です」「ます」に推量の助動詞が接続する場合において、「う」（「よう」）と「だろう」のどちらが用いられているかを考察したが、その結果、終止用法として動詞に接続する推量の助動詞は、「う」から「だろう」に移行していると考えられる。また、形容詞「ない」に接続する場合は、現在推量の形では徐々に「う」から「だろう」に移行しているといえる。それに対して、助動詞「ない」では「う」はすでに衰退し、「だろう」に交替したように見受けられる。また、過去形においては、形容詞の「ない」と助動詞の「ない」は両方とも、「だろう」が接続しにくく表記の上では「う」が保存されたと考える。

疑問用法として動詞に接続する場合、「う」は並列、もしく

は反語的に用いられるようだが、一般的な疑問文としては、「だろう」が用いられてきた。また、形容詞「ない」に接続する場合は、助詞が下接することが多く、徐々に「う」から「だろう」に移行しているとはいえ、まだ「う」が多く用いられる傾向にあった。ただし、助動詞「ない」では終止用法と同様に、「う」は衰退し、「だろう」が交替したように見受けられる。過去形においても、「だろう」は接続しにくく「う」が保存されたと考えるが、鷗外の作品には終止用法・疑問用法共に「だろう」が用いられていることから、当時すでに口語的には「なかっただろう」「なかっただろうか」という形は出現していたと考える。

このように、終止用法・疑問用法においては、推量形は「う」から「だろう」に移行しつつあるのだが、仮定的用法においては、助詞「と」や「が」が下接する場合、「だろう」に移行せず「う」のまま用いられていた。また形容詞「ない」・助動詞「ない」においても、「う」が用いられており、「う」から「だろう」に移りつつある推量表現が、仮定的用法の場合は「う」が保存されることがわかった。

さらに、「です」「ます」に接続する場合にも「でしょう」「ましょう」のように「う」で表わされる。また助動詞「ない」でも、終止用法、疑問用法の場合は、「だろう」に移行していたものが、「です」「ます」に接続する場合は「だろう」が用いられている例はなく、大抵の場合、「う」が「です」と共に用いられ「ないでしょう」「なかったでしょう」という形になっていることがわかった。

以上から、仮定的用法、「です」「ます」に接続する推量の助動詞は、「う」が保存されていると考えられる。

＊本文中に引用したものは全て「漱石全集一～八」（岩波書店）、「鷗外全集六、八、九」（岩波書店）、「圓朝全集一～四、九」（春陽堂）による。

〈参考文献〉

北原保雄『日本語助動詞の研究』（大修館書店一九八一年一一月）
此島正年『国語助動詞の研究』（桜風社一九七三年一〇月）
佐伯哲夫「『ウ』と『ダロウ』の職能分化史」（「国語学」一七四　一九九三年九月）
外山映次「推量（現代語）う・よう」（「国文学　解釈と教材研究」）
田部井圭子「談話における『だろう』構文」（亜細亜大学教養

部紀要四一　一九九〇）
森田良行「日本語の助詞・助動詞」（明治書院『現代日本語講座　第五巻　文法』所収二〇〇一年四月）
吉田金彦『現代語助動詞の史的研究』（明治書院　一九七一年四月）
日本国語大辞典　第二版（小学館）

（ながい　みなこ／大阪産業大学附属高等学校非常勤講師）